

## 3期生会

◆宮下

誠

平成十四年ホームカミングデイについて  
（出席できなかつた三期生の皆さんへ）

ホームカミングデイ（HCD）の奴が  
今年（平成十四年）もやって来ました。  
今年は何か気取って、きらびやかに着飾  
ってしかもおずおずとやって来ました。

幼児から少年の頃、お正月は私たちに  
とって妙にこだわりの雰囲気をもとって  
いました元日の朝起きると枕元に並べて  
あつた晴れ着を見て、一瞬とまどい、周  
りを見渡してからどこかくすぐつたい感  
触で袖を通したことを思い出します。そ  
んな「お元日」の気分が、今年のHCD  
に感じられます。

「小原台一期生」

校長の挨拶にこんな言葉を見つけること  
ができます。泥濘の小原台に全国から選ば  
れて（とおもっていた）入校した少年達が  
四年間名立たるほこりにまみれて卒業した  
三期生を西原校長はこのように端的に表現  
しました。その小原台へ幾星霜のしわをき  
ざんだ顔、顔が戻ってきました。

自分たちの行事が、例年に比べて特別のものであるとの表現は気恥ずかしい。去年も来年もきつと特別なものであるに違いないのに、やはりそう思うのです。

最高司令官が小泉総理でした。学生の頃の国政選挙で清き一票を投じたかもしれない小泉純也元防衛庁長官の子息である地元の小泉純一郎が栄誉礼とともに現れたのです。防大卒業生が初めて防衛庁長官として登壇し、小原台っ子に訓示をしました。防大二十四期生国務大臣中谷元でした。プロパーの教職員から初めて校長となった西原正が行事の主宰者でした。

小原台の環境も一変していました。新装なった校舎群、これらのとう尾を飾る大講堂が訪れる人に胸を張っています。五十周年記念行事を迎えようとしている小原台の晴れ姿です。季節を間違えたように桜の花までがほぼ満開でHCDの参加者を迎えてくれました。

さて主題のHCDはどうだったでしょうか。人数がこれまでより多い三期生だから当然かもしれないませんが、HCDプロジェクトチームが前年秋につかんだ参加希望者数は四百六十名にも達するものでした。このことによりチームは同期生の

熱い思いを知ることができました。卒業式会場の大講堂がいまだ建設中でペールに覆われているのに、賑々しく関係者が群れ集う気配のもとで卒業式に全員出席できるのか？悲喜こもごもありましたが時が解決しました。

卒業式の式辞の中で「白い頭の方も多く見受ける」と西原校長はHCD参加者にエールをおくってくれました。卒業生の帽子投げに目を奪われ、凛々しい女子学生指揮官の号令に耳をそばだて、後輩の操縦する編隊の轟音に空を仰いでいるうちに、私達が主役の記念撮影となりました。撮影は担当者の心配をよそに、天候と写真屋さんの高い技術力に恵まれて、後日それぞれに届いた記念写真には小原台上に三期生の笑顔の花園が広がっていたのです。一人一人の顔だってヨーク見えるジャン。

HCDのメインイベントは東京湾を見下ろす同窓会館での懇親会でした。全く見覚えのない人と飲んで話すうちに、だんだん昔の姿に戻ってしまい、「おお、貴様か」と二度目の再会の握手がこちらにもあちらにも魔法のように生まれるのでした。西原校長も会に華をそえた後、「海

青し」の大合唱がこだまするなか、短い時間にぎっしり詰まったHCDは終わったのです。

ここで小文はHCDの新たな展開について紹介しなければなりません。それはHCDを契機に芽生え育ってきつつある同期生活動の盛り上がりについてです。六十五歳を過ぎ、私達三期生のほぼ全員がいわゆる年金生活に入りました。高齢化社会の尖兵として長い余命を生きて行くためには仲間が必要です。自衛隊や会社に替わる何かが求められています。その仲間社会は共通の基盤、異色の情報源、相互信頼性等に富んでいることが望ましいでしょう。同期生会はこれらを十分に満たしていると思われず。このたびのHCDの参加者数の多さは、単なる懐古だけでなく上に述べた希求の濫觴とも受け取れます。

最近北海道、北陸、九州、また首都圏でもやや離れた地区で同期生会の支部等の集りが頻繁に行われるようになりました。懇親のみならず政治、趣味、健康、学術などさまざまの交流が生まれITの時代の波に乗って成果を広く発信しています。HCDはまったく良い時期に行われたものだとつくづく思うこのごろです。

HCD懇親会でお願いしましたが、HCDのすばらしかった感動を不参加の同期生に伝えることが前述の新しい流れを作る有力な一歩だとおもいます。これからの本当の人生を手を取り合って進もうではありませんか。